

二〇二四年度 三田学園中学校入学試験問題

前期A日程 国 語

〈注意〉 各問題の解答はすべて解答用紙に書き入れなさい。

※出題の都合上、漢字にふりがなをふる、漢字をひらがなにするなど、本文の一部に改変を行っています。

※特に指示のない限り、字数制限のある問題では句読点や記号も一字として数えます。

受験番号	
------	--

一、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

自分にはいろんな面があるものだ。鈍感^{どんかん}なところがあるかと思えば、やたら過敏^{かびん}で気にしすぎるところもある。心配性^{しんぱいしょう}で臆病^{おくびょう}なくせに、意外にX[×]なところもあったりする。親切^{はつき}さを発揮^{はつき}することもあるのだが、人を冷淡^{れいたん}に突き放して見ていることもある。みんなと一緒に賑^{にぎ}やかにはしゃぐこともあるけど、ひとり静かにしていることもある。いろんな面があって、何ともつかみどころがない。それが自分だ。

自己紹介^{じこしょうかい}をしなければならぬときなど、どんなふうに話したらよいかと迷い悩^{なや}むものだ。それも、自分が多面体だからだ。

自己紹介なんて、人の紹介をするわけではなく、自分自身のことを言えはいいのだから、簡単にできそうなものだが、考えれば考えるほど、自分の特徴^{しゅくごう}がどこにあるのかわからなくなる。

さらには、自分のどんな面をとくに紹介したらよいかで悩む。自分のどこを取り出すかによって、さまざまな自己像を組み立てて示すことができるからだ。だからこそ、自分のどのあたりに焦点^{しやうてん}を絞^{しぼ}ったら、その場に最もふさわしい自己紹介になるんだろうと迷うことになる。

自己紹介をした後も、何となく落ち着かない。これでよかったんだろうか、もうちょっと違^{ちが}う自己紹介をした方がよかったんじゃないかといった思いが駆けめぐる。①ほんとうの自分を出していないような、偽^{いつはり}ってしまったような不安全感^{ふぜんかん}に苛^{さい}まれることもある。

小説家の村上春樹^{むらかみはるき}は、そのような自己紹介をめぐる葛藤^{かつぽん}について、小説の主人公に語らせている。

「自己紹介。

昔、学校でよくやった。クラスが新しくなったとき、順番に教室の前に出て、みんなの前で自分についていろいろと喋^{しゃべ}る。僕はあれが本当に苦手だった。いや、苦手というだけではない。僕はそのような行為^{こうゐ}の中に何の意味も見出すことができなかったのだ。僕が僕自身についていったい何を知っているのだろうか？ 僕が僕の意識を通して捉^{とら}えている僕は本当の僕なのだろうか？ ちょうどテープレコーダーに吹き込んだ声が自分の声に聞こえないように、僕が捉えている僕自身の像は、歪^{ゆが}んで認識^{しんしき}され都合良くつくりかえられた像なのではないだろうか？……僕はいつもそんな風に考えていた。自己紹介をする度に、人前で自分について語らなくてはならない度に、僕はまるで成績表を勝手に書き直しているような気分になった。(中略) なんだか架空^{ちやう}の人間についての架空の事実を語っているような気がしたものだ。そしてそんな気持ちで他のみんなの話を聞いていると、彼らもまた彼ら自身とは別の誰かの話をしているように僕には感じられた。我々はみんな、架空の世界で架空の空気を吸って生きていた。」(村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』講談社文庫、一九九一年)

このように自分のどこを取り出そうかと迷うのは、自分が多面体であるからだ。

「学校の友だちといふときの自分と、家にいるときの自分とは、まるで別人みたいに違うんです。二重人格なんじゃないかって気になって……」

「クラスの仲間の前にいる自分と、サークルの仲間の前にいる自分が、まったく雰囲気^{ふんいき}が違ってて、どっちがほんとうの自分かわからなくなることもあるんです。これって二重人格なんじゃないか……」

大学でカウンセラーをしていた頃、そのような相談を受けることがあった。「自分らしさって何だろう？」という感じで自分を振り返るように
なって、^② 場面によって違う自分になっていることに気づく。青年期になるとだれもが経験することのはずだ。

べつに病的な意味での二重人格なわけではない。僕たちは、相手によって違う自分を出している。だれもが人格の Y を生きているのだ。
² レストランで家族と一緒に食事しているとき、すぐ後ろのテーブルで ³ 学校のクラスの仲間たちがお茶しているのに気づくと、何だか気恥ずか
しい感じがする。それは、ふだん学校で見せていない自分を見られたような気がするからだ。

好きな異性と ⁴ 喫茶店でしゃべっているときに、親と親しい近所のおばさんたちが入ってくると、なぜか話しくく、ぎこちない感じになる。
それは、好きな異性としやべっていると、ふだん家族の前で出していない自分がつい出てしまうからだ。

このように ^③ だれもが相手によって違う自分を出している。

ジェームズは、人は自分を知っている人の数だけ社会的自己をもつが、同じ集団に属する人たちからは似たようなイメージをもたれているだろ
うから、所属する集団の数だけ社会的自己をもつという。これは、まさに僕たちが相手によって違う自分を出していることを指すものといえる。
二人きりだと話しやすいのに、三人以上になると話しくくなることもある。とくに別のグループの人物が混じっていたりすると、何だか話し
にくく気詰まりになる。それは、相手によって、あるいはグループによって、出している自分にズレがあるからだ。

意識して違う自分を出しているわけではない。だれと一緒にいるかによって、違う自分ごく自然に引き出されるのだ。こんな自分を出すのは
気まずいと感じることがある。相手によって出しやすい自分と出しにくい自分がある。何となくそれを察知して、相手にふさわしい自分、その
場にふさわしい自分が引き出される。

場面そのものに、こちらの自分の出し方を規定する力があるといった感じた。

ここから言えるのは、ふだんと違う場に身を置くことによって、いつもと違った自分が引き出されることが期待できるということだ。違うグ
ループの子と話してみる。気になるサークルやイベントに思い切って参加してみる。新しいアルバイトにチャレンジしてみる。そこに新たな自分
が顔を出してくることがある。

いつも的人际关系の中にいるかぎり、その仲間たちの視線を裏切れない。視線の拘束力^{注5}は非常に強く、ちよつとでもいつもと違う自分が出たり
すれば、何だか違うなと感じた周囲の仲間たちから訝しげな目で見られる。

「どうしたんだ、お前らしくないな」みたいに言われるのが面倒なため、いつもの自分が窮屈^{きゆうくつ}に感じてても、ちよつと違う面を出したい気分^{きぶん}に誘わ
れても、いつもの自分に収まるように自分を抑える。

このように身近にかかわっている人たちの視線を裏切るのは非常に難しい。違う自分も見てみたいと思うとき、自分の殻^{から}を破りたい衝動^{注6}に駆ら
れるとき、自分がいかに周囲の視線にがんじがらめに縛^{しば}られているかに気づく。

だからこそ、^④ 新たな自分を見てみたいと思うなら、習慣化したかかわりの世界から思い切って飛び出してみることだ。

(榎本博明『へ自分らしさ』って何だろう? 自分と向き合う心理学』より)

注1 葛藤・・・・心の中であれこれなやむこと。

注2 認識・・・・ものごとをはつきりと知り、正しく理解すること。

注3 架空・・・・実際にはなく、想像で作り出したもの。

注4 サークル・・・・同じ好みを持つなかまの集まり。

注5 拘束力・・・・自由な行動を制限する力。

注6 衝動・・・・急にある行動をしようとする心の動き。

問一 空らん X に当てはまることはとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 繊細 イ 大胆 ウ 陽気 エ 真面目

問二 ——— 部①「ほんとうの自分を出していないような、偽ってしまったような不安全感」について、同じ気持ちを述べている部分を

「村上春樹」の小説から二十二字でぬき出して答えなさい。

問三 空らん Y に当てはまるものとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 非日常性 イ 不安定性 ウ 二面性 エ 多重性

問四 ——— 部②「場面」に当たるものとして最も適当なものを、本文中の~~~~部1〜4から選び、数字で答えなさい。

問五

——部③「だれもが相手によって違う自分を出している」について、次の問いに答えなさい。

1、「相手によって違う自分」と同じ意味のことを、本文中から五字でぬき出して答えなさい。

2、——部③の具体例として適当なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 弟は、普段は愛想がよいが、疲れていると不機嫌になってしまう。

イ 姉は、電話を取る時だけ声がいつもより高くなる。

ウ 私は、落ち込んでいるときはみんなと一緒にいてもはしゃげない。

エ 私は、友だちに言えないことでも愛犬にだけは相談することができる。

オ ぼくは、小説を読んでいるときだけは、辛いことを忘れることができる。

問六

——部④「新たな自分を見てみたいと思うなら、習慣化したかかわりの世界から思い切って飛び出してみることだ」について、次の問いに答えなさい。

1、「新たな自分」を出せないのはなぜですか。

2、「新たな自分」を出すにはどのように行動すればよいのですか。

二、次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

どうして

X

小学生のときから不思議でたまらなかった。

① 通信教育の国語ドリルをするのにも、問題文を読むのに時間がかかる。たぶん弟の三十倍くらいかかっている。

国語の時間に教科書を音読するように当てられるのは、本当に嫌だった。(Y)、教科書に書いてあるものだったら、弟が家で音読しているのを聞いていて、内容は覚えている。(Z) 咳き込んだふりをして時間を稼いだり、つかえたり読み間違えたりしながらも、これまでなんとかやり過ごしてきた。

字が読めないというわけではない。超がつくほど苦手なだけなのだ。

苦手なことより、褒められることをしたい。いま思えば、小学生のころは褒められることがたくさんあった、優しいとか、丁寧とか、落ちつきがあるとか、係をしているとか。

「苦手だっというわけばかりして、読む練習をしないから、いつまでたっても読めないのよ」
とおかあさんにいわれたことはある。それから「根気がない」とも。

そうかもしれない。でも、周りのみんなは、わたしほど読むことが大変そうには見えない。

わたしが急なぼり坂をひいこらよじ登っているときに、みんなは景色を楽しみながらすいーっと飛行機で飛んでいくみたい。そのくらい違っているように感じている。飛行機に乗っているのなら、一時間や二時間読んでも疲れない。でもよじ登っているわたしは、少しもしないうちに疲れてしまう。

月曜日の帰りの会で、読書記録カードが班ごとに張り出された。

カードの数が一番多かったのが、賀川^{かがわ}さんたちの班。賀川さんと倉本^{くらもと}さんはいつもクラスでキラキラしている。入来^{いりきり}理幹^{りき}は出さなかった。

わたしも、班の人に「まだ読んでいる途中だから」と伝えて、出さなかった。だって、本当だもの。ちゃんと読もうとしたけれど、土日のあいだに二十ページしか読めなかった。

ほかにも出さない子が七、八人いたから、少しほっとした。② 先生は「来週までには読みなさいね」といったきりで、直接はなにもいわれなかった。

それで安心していただけではないけど、当然のように、次の週もカードを出せなかった。

そうしたら、放課後に居残りすることになった。二週間たってもカードを出せない理由をノートに書いて提出しなさいって。

③ 居残りは五人だった。先生は、ノートの内容を一人ずつ読み上げた。

『うちに本がありません』と書いたのは井田^{いだ}くん。

A

『なにを読んだらいいのかわかりません』と書いたのは星^{ほし}くん。

『どうやって決めたらいいのかわからないです』

B

『それが、自分がどういう本が好きなのかさっぱりわからないです』

『読まないといけないわよね。みんなが読んだ本から読む本を選んでもいいのよ。教室の後ろに張り出してあるでしょう。じゃあこういうのはどう？ 星さんと同じ名前の作家の本を読んでみるの』

次の宮川^{みやがわ}さんのノートは、右上がりの字が並んでいた。

『妹が生まれたばかりで、赤ちゃんの世話とお手伝いに夢中になっていて、ちゃんと読んでいませんでした。先週からおとうさんと一緒に^{いっしょ}育児の本を読んでいるので、今週中には読み終わると思います』

『家族が増えてにぎやかなのね。お手伝いをするのはとてもいいことね。』

C

次はわたしの番だ。

『毎日少しずつ読んでいるのですが、内容が難しいので時間がかかっています』

『石崎^{いしざき}さんはなにを読んでいるの？』

『ダニエル・キイスの『アルジャーノンに花束を』です』

『春休みに読んだっていつてなかった？』

『途中だったんです。読んでいるんですけど、なかなか進まなくて。中学生には難しいって先生がいつて……おっしゃってたとおりで』

『難しい本にチャレンジするのはいいことね。』

D

怒られなかったので、緊張^{きんちよう}でかいた手のひらの汗がすうっと引いていった。先生はまだわたしが本好きの優等生だと思っているみたい。

次は理幹だ。先生でなく本人がぼそぼそと読み上げる。

『^注プライバシーと読書の秘密を守りたいので、読んでいる本を全部知られたくありません。』

プライバシー権を、おかあさんと一緒に調べてみました。憲法十三条の個人の尊重や幸福追求権で保証される基本的人権だそうです。「読者が何を読むかはその人のプライバシーに属すること」と日本図書館協会の「図書館の自由に関する宣言」にも書かれています。

なにを読むか、いつどれくらい読んだかはその人の思想や人格そのものに関わるもので、その情報をみんなに知らせるか知らせないかも本人が決めることだそうです。なので、生徒が読んだ本のすべてをクラスで公開することに、違和感^{いわかん}を持っています。

ちなみに、読んでいないではありません。中学生になったら読むようにって、おじいちゃんがずいぶん前に買っておいでくれた「翔太^{しょうた}と猫^{ねこ}の

インサイトの夏休み」という本があったのを思い出して、いまはそれを読んでいます』

長い。ノートには几帳面な文字が均等な間隔で並んでいた。

先生はどう反応するだろう？ 聞きながら、不安になってしまった。理幹は先生を怒らせたのだろうか。それとも、こうやって伝えれば大人はわかってくれると思ったのだろうか。

理幹が読み上げ終わると、先生はわざとらしいほど困っている顔（やれやれ）をしていた。

「読んでいるのにカードに書かないから、同じ班の人が困っているわね。書けば入来さんの班がトップになれたのに、同じ班の子がかわいそうね」
「そうですね。そのせいで、きょう筆箱をゴミ箱に捨てられていました。清水清歌さんが教えてくれたんです。やったのはうちの班の男子だと思うんですけど」

「あらそう。教えてくれてありがとう。人の筆箱を捨てるのはよくないことです。先生も気をつけておきます。入来さんも、どうしたらそういうことにならないか、よく考えてみなさいね」

頭のなかにピコツと現れた先生^{注2}ラインスタンプは、眉を上げ、目をぱっちり開いたまじめ顔（よく考えよう）。
「そういうわかれた理幹は、おじいさんみたいに眉間にしわを寄せた。」

「先生は、いつまで続けるつもりですか」

「ずっとよ。少なくとも一学期中は続けます」

「そうですか」

理幹はがっかりした眉毛の形でノートを受け取り、肩を落とした。

先生は優しい声でいった。

「こういうことに意地を張っても、だれも得をしないのよ。だからみんな、書いて協力しているでしょう？」
自分がいわれたわけではないのに、わたしの心のなかにもややもやした感情が残った。

（梨屋アリエ『きみの存在を意識する』より）

注1 プライバシー・・・他人に知られたくない、個人の私生活上のことから。

注2 ラインスタンプ・・・スマートフォンでメッセージのやりとりをする際に、文字の代わりに送るイラストや画像。

問一 本文全体を大きく二つに分けるとすれば、どうなりますか。後半部の最初の五字をぬき出して答えなさい。

問二 空らん X に入る表現として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア みんなはすらすらくさん読めるんだろう
イ みんなは言われたことができるんだろう
ウ わたしはこんなに本がきらいなんだろう
エ わたしは宿題をちゃんと出せないだろう

問三 空らん（Y）・（Z）に入ることばとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 例えば イ つまり ウ だから エ また オ でも

問四 ——— 部①「通信教育の国語ドリルをするのにも、問題文を読むのに時間がかかる」とありますが、その様子を比喩的に表した部分を二十字以内でぬき出して、最初の五字で答えなさい。

問五 ——— 部②「先生は『来週までには読みなさいね』といったきりで、直接はなにもいわれなかった」とありますが、「先生」は「わたし」のことをどのような人物だと思っていますか。本文中から十字以内でぬき出して答えなさい。

問六 ——— 部③「先生は、ノートの内容を一人ずつ読み上げた」とありますが、「わたし」の番が回ってくるまで、「わたし」はどのような気持ちになっていましたか。説明しなさい。

問七 本文中の空らん A ～ D に当てはまる会話文をそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア タイトルや表紙で決めてもいいのよ。自分の好みの本を読めばいいんだから
イ でも時間がかかりすぎるわね。もっとすぐ読める本からたくさん読んだほうがいいと思うわ
ウ でも、読書をする時間を作るのも大切なことだから、上手うまくやりくりしてくださいね
エ 学校図書館で借りなさい。読む本が必要って、おうちの人にも伝えなさい

問八 ——— 部④「読書の秘密」とは何ですか。解答らんに合うように本文中から二十字以内でぬき出して答えなさい。

問九 ——— 部⑤「先生はわざとらしいほど困っている顔（やれやれ）をしていった」とありますが、その原因となった出来事を答えなさい。

三、次の（①）（②）（③）（④）（⑤）（⑥）（⑦）（⑧）（⑨）（⑩）に入る四字熟語として適当なものを後のア～コから選び、それぞれ記号で答えなさい。
ただし、同じ記号は二度以上用いてはいけません。

- （①）に言って、その意見には反対です。
（②）で、あなたの気持ちはわかったよ。
昨年（しねん）は敗戦（ばいせん）続きだったので、今年（ことし）は（③）したい。
（④）する人々（ひとびと）が加わり、さわぎが大きくなった。
相手（かた）は（⑤）の者（もの）だ。けっして気をゆるすな。
この技術（ぎじゆつ）は（⑥）には身（み）につかない。
（⑦）の規則（きそく）については、もう一度（いちど）考え直（なお）そう。
（⑧）の科学（かがく）技術（ぎじゆつ）に、人間（にんげん）が追いつかない。
（⑨）に、話し合（か）いを拒否（きよひ）された。
口先（くさき）だけの人間（にんげん）が多い中（なか）、彼は（⑩）の人（ひと）といえる。

ア	以心伝心	イ	一朝一夕	ウ	海千山千	エ	汚名返上	オ	单刀直入
カ	日進月歩	キ	不言実行	ク	付和雷同	ケ	問答無用	コ	有名無実

四、次の——部を適切な敬語表現に直しなさい。

- ① 「お肉とお魚、お客様はどちらにしますか」と客室乗務員に聞かれた。
- ② 私の父が、先生によりしく伝えてほしいと言っておりました。
- ③ 同窓会へはお車ではなく公共交通機関で来ててください。
- ④ せっかくのお誘いなので、喜んで行きます。

五、次の——部のカタカナを漢字に改めなさい。

- ① キリツ正しい生活を送る。
- ② 飛行機のソウジユウを習う。
- ③ 学級ニツシに記録する。
- ④ ツウヤクの資格を取る。
- ⑤ サイバンの結果が出る。

